

〒060-0808
 札幌市北区北8条西6丁目2-23-806
 TEL 011-594-8454
 FAX 011-594-8455
 URL http://tomari816.com
 E-mail info@tomari816.com
 郵便振替口座 02790-1-100850

原発のない安全な北海道に



第29回 法廷だより

2019年8月21日、第29回口頭弁論期日が札幌地裁で開かれました。

雨天の下 傍聴席は満員

2019年8月21日午後2時00分より札幌地裁で、第29回口頭弁論期日が開かれました。傍聴席は若干の空席がありました。概ね埋まりました。

今回の期日では、弁護団から、原発敷地内の地層の追加調査について、結論を左右するものではなく、結果を待つまでもなく廃炉の判断をすべきとの内容の準備書面(38)と、F-4断層の活動性に関し、これを否定する被告の主張の誤りを指摘しつつ、約12〜13万年前以降の活動性は否定できず、泊1、2号機が立地不適である旨主張する準備書面(39)を提出しました。また、菅澤弁護士において、F-4断層の上載地層の年代特定にかかる地学的な見地について、要点をまとめたDVDを用いて裁判所に対しプレゼンター



にされたのは初めてで、これは大きな成果でした。

原告意見陳述

原告の意見陳述は、北上雅能さんが行いました。廃炉とすべき5つの理由として、①安全性が担保されないこと、②原発の不経済性、③労働者の被爆、④環境汚染、⑤高レベル放射性廃棄物の問題を挙げつつ、胆振東部地震による泊原発の外部電源喪失によって生じた危険性や原発依存の構造の問題点を主張し、廃炉を訴えました。(意見陳述の内容は2ページ。)

弁護団の主張内容

準備書面(38)では、被告による敷地内の地層の追加調査について、いたずらに結論を先延ばしするだけで、結論を左右する可能性が低いことを規制委員会での議論をもとに主張し、現時点で原発による具体的な危険の存在が明らかである以上、追加調査の結果を待つまでもなく、廃炉の判断をすべきと主張しました。準備書面(39)では、被

告がF-4断層の活動性を否定する根拠としていた変位・変形のない地層は、被告が従来主張してきたHm2段丘堆積物ではなく、少なくとも4・2万年前以降に堆積したD層であり、かつ大規模な攪乱作用が生じているので、当該地層に変位がないことによっては、約12〜13万年前以降の断層変位を否定できず、新規制規準による活断層にあたるので、泊1、2号機は立地不適であると主張しました。

今後の予定等

次期期日は、令和元年12月3日(火)午後2時00分からです。(なお、次々回は令和2年2月18日(火)午後2時00分と予定されています。)被告は追加調査の結果の経過報告をすと言っています。報告が、その内容は不明です。もし結論の先送りにすぎなければ、結審を強く求めていくこととなります。

次回もたくさんの方に傍聴においていただき、ともに廃炉への意志を表明していきましよう。

(文責) 佐々木泰平

シヨンを行いました。

被告からは、耐震重要施設の判断基準に関する証拠が提出されたほか、敷地内調査を10月中に終える予定である旨明らかにされました。被告から、敷地内断層と耐震重要施設の位置関係が公式に明らか

原告意見陳述書

令和元年8月20日

原告 北上 雅能

北電泊原子力発電所を廃炉にする理由は、5つあります。

理由1 安全が担保されない

「世界最高レベルの規制基準」なる言葉が、一人歩きしています。

原子力規制委員会自ら「これを満たすことによって絶対的な安全性が確保できるわけではありません」と述べているにも関わらず、川内でも玄海、伊方、大飯、高浜でも、原発再稼働の免罪符になっているのは、どうしたことでしょいか。

電力会社はもとより、自治体の長までが「これで安全性が証明される」と有難がっているのは、如何なものでしょうか。

「安全」と「安心」は違います。原発は「安全」ではなかったのに、2011年3月11日まで国民は疑心暗鬼となく「安心」していました。そのしつこく返してきて、今や「安全」を強調されても国民は「安心」出来ない状態になっています。

原子力発電の技術は、そのまま核兵器開発に転用される危険があります。またアーク等の脅威にも備えなければなりません。

その為、軍事レベルの機密保持と情報管理、組織管理が徹底されます。これは容易に隠蔽や改竄、虚偽の報告等の温床となり得るものです。つまり、オープンな議論は出来ないというところで、これでは安全が担保できません。情報の公開と共有は、安全確保の必須条件だからです。

いや、そもそも安全論議に惑わされてはなりません。仮に「安全」であっても再稼働させてはならない、その理由を以下に述べます。

理由2 その不経済性・不採算性

「グリーンで安価」明るい未来のエネルギーになるキャッチフレーズはまやかしでありました。除染や放射性廃棄物の処理費用、廃炉に至るまでの経費、それら社会的費用とされる一切合切を算入すると、原発は恐ろしいまでの金喰い虫であり、もはや市場における商品としての競争力は無く、日本の原発の海外売込みがごとごとく失敗している事は、いまだでは誰もが認識しています。

理由3 際限なく被曝者を増やす。

ウランの採掘に始まり、原発が役目を終え廃炉となった後々までも、全期間にわたって被曝労働者を増やしていきます。原発がある限り、事故の有無に関わらず稼働の有無に関わらず、携わる労働者は被曝させられるのです。

理由4 環境への汚染

冷却水として環境に放出される放射性物質は、沈殿や対流を繰り返しながらより広い外洋に拡散し続けていきます。

原発周辺域の放射線量が仮に基準値以下であったとしても、膨大な海水によって希釈されただけで放射線量が半減したわけではありません。家の前の「ミミを」となるの敷地に移したようなもので、量としては変わらず、海洋全体では蓄積し続けていくのです。

よく使われる「風評被害」という言葉も正確ではありません。原発由来の放射性物質はそこにある訳です。

理由5 高レベル放射性廃棄物

原発がある限り、放射性廃棄物は産み出されます。最終処分場の展望も無いままに、いたずらに核のゴミを増やし続ける事になるのです。

(その一方で政府は、住民の声を無視しながら北海道・幌延など特

定地域を最終処分場にしようとして画策している事も付け加えておきます)



以上述べた5つの項目が、北電泊原子力発電所を廃炉にする理由なのです。

さて、昨年9月6日に発生した北海道胆振東部地震は、ブラックアウトをはじめ、多くの課題を顕在化させました。泊原発も外部電源を9時間半喪失したのです。2011年、福島第一原発事故の時は、全電源喪失から5時間後には原発から3km以内の住民に避難指示、3km 10km圏内に屋内退避指示が出されています。

これは泊村、岩内町、共和町と古平町の一部に該当します。幸い、泊原発は停止中でしたが、これが稼働中であつたら、さらに非常用電源での冷却に失敗していたらと思うとゾッと致します。

ところが一方で地震直後から、「泊原発が稼働していれば、ブラックアウトにはならなかった」なる発

言が飛び出しています。9月25日産経新聞や経団連会長の中西氏の発言です。ちなみに、彼は日立製作所出身であります)

人の不幸を前にして、「聞き捨てならぬ」とはこのことです。北海道電力が、フクシマ事故後も、経営の基軸をあくまで原発に置き、火力発電その他に必要な投資をしておかなかったこの事が原因であると指摘されています。まさに「原発があつたから、ブラックアウトになつた」ではありませんか。論理が転倒しているのです。

さて、そのブラックアウト直後の昨秋10月、私共は「後志管内自治体要請行動」に参加しました。各自治体を訪問して、住民に寄り添った防災体制とは、或いは実効性のある避難計画とはどのようなものか？など泊原発廃炉に向けての話をさせていただきました。

3日間で、13の市町村をめぐり、移動しながら感じたのは「俺たちの後志は、何て広いんだろう」ということでした。

奇岩絶壁連なる海岸線、紅葉の山々、初冠雪をいただいた羊蹄山から豊かに稔れる丘陵に至るまで、この美しい後志の、そして北海道の山と海とを、放射性物質によって汚染させる事なく、次の世代に残していく。それが私たち大人の責任であると強く思ったのでした。

私たちの弁護士

Vol.4 難波 徹基 弁護士

泊原発裁判弁護団の献身的な活動は、活動実費以外は完全無報酬で、泊原発を廃炉にしたいという信念の下、裁判を進めています。こうした弁護団を構成する弁護士の姿を紹介합니다。

泊原発裁判の代理人になつた動機は？

環境問題には関心を持ち、取り組んでいましたが、原発問題に関わつたことはありませんでした。原発裁判というと、難しい、長い、勝てない、暗い、そんなイメージが強く、また、どこかで大事故なんて起こる確率は低く、大丈夫なんじゃないかとも思っています。関わることを避けていたのです。しかし、東日本大震災が起きて、そんな呑気なことを言うてはいられなくなりました。連日放映される衝撃的な映像に地震の力、恐ろしさを思い知らされました。また、震災から数ヶ月後に被災した街を訪れると、街は潮の匂いにする残骸だらけでしたが、街の前に広がる海は何ごともなかったように穏やかで、美しく、自然とは人間がどうこうできるものではない、もっと自然に対して謙虚でなければならぬと改めて

思いました。福島第一原発では緊迫した状況が続き、原発に関する知識が増え、理解も進むと、原子力の危険性やそしてその危険が気の遠くなるほどの長期間続くことを考えれば、およそ人間が扱えるものではないと思ひましたし、原子力発電といつても発電の構造は単純で、お湯を沸かすためにあえて原子力を使う必要もない、そして、何よりこんなものを次の世代に押し付けてはいけない、われわれ現世代の責任でエネルギー政策を転換させなければならぬ、と強く思うようになりました。

今までに忘れられない裁判はありますか？

自然環境に関わる裁判の中では、「えりもの森」裁判が特に印象に残っています。人の目の届かない山奥の森で、森林を次世代の木に更新させるために整備するという名目のもと、大規模な伐採が行われていたことがわかり、その問題と責任を明らかにし、さらなる伐採を阻止しようと起こされた住民訴訟でした。裁判では、森林の公益的機能や道民の財産として価値を評価するよう訴えました。地裁では負けたものの、高裁で審理のやり直しを命じられるなど珍しい経過を辿つたこともあって、平成17年

の提訴から決着まで10年以上かかりました。私が担当した裁判の中では最長で、廃炉訴訟がこの記録を超えることのないことを願っています。その間、何度か現地に行き、伐採地のその後の推移、一度失われた環境は簡単に再生しない様子を見たことは、環境の問題に積極的に関わつていこうと思ふきっかけとなりました。また、現地訪問の中には、当事者双方に加えて担当裁判官も現地を訪れ、一緒に伐採地の状況を確認したこともありました。原告や支援者が森の中の裁判だといれそうに話していたのが印象に残っています。



趣味を紹介してください

札幌に来て20年、カヌーやキャンプなど休日には北海道の自然に遊んでもらっています。最近ではロードバイク、冬は山スキーを楽しんでいます。

泊原発を再稼働させない！

七タパレード

北海道電力が、規制委員会に再稼働の申請を行った日が6年前の2013年7月8日。それから6年後の7月7日七タの日、気持ちの良い夏の日差しのもと泊原発を再稼働させない北海道連絡会主催による「泊原発を再稼働させない！七タパレード」が100名の参加のもと札幌で行われました。



パレードに先駆けて進行役から「北電は再稼働させて電気料金の値下げをすると言っていますが、既に2000億かけた安全対策費をさらに増やさなければ再稼働できないわけで、動かすためには料金値上げが必要になります。一日も早く再稼働を諦め自然再生エネルギーへの転換を促そう」との挨拶がありました。

参加者はそれぞれの団体の職やアピールグッズ持ち、元々コーラーの呼びかけるコールはいつも以上に今風のラップ調でも元気がよくノリノリ。今回は札幌駅前通り中心のパレードで沿道の市民の皆さんの反応も上々でした。ドラムの他にホルンの音色もありとても楽しいパレードになりました。

北海道電力が、規制委員会に再稼働の申請を行った日が6年前の2013年7月8日。それから6年後の7月7日七タの日、気持ちの良い夏の日差しのもと泊原発を再稼働させない北海道連絡会主催による「泊原発を再稼働させない！七タパレード」が100名の参加のもと札幌で行われました。

パレードに先駆けて進行役から「北電は再稼働させて電気料金の値下げをすると言っていますが、既に2000億かけた安全対策費をさらに増やさなければ再稼働できないわけで、動かすためには料金値上げが必要になります。一日も早く再稼働を諦め自然再生エネルギーへの転換を促そう」との挨拶がありました。

事務局 廣谷淳一

難波 徹基 弁護士

所属事務所

のぞみ・ひかり法律事務所

札幌市中央区北1条西10丁目1番地21ユーネットビル3階

講演会

「待ったなし、どうする?」危険な核の「ゴミ」

(元原子力資料情報室スタッフ)

澤井 正子

6月8日に当会主催で、講演会「まいったなし、どうする?危険な核の「ゴミ」を開きました。講師は、元原子力資料情報室スタッフの澤井正子さん。澤井さんは、中央大学経済学部を卒業後、チエルノブイリ原発事故を契機に反原発運動(「反原発出前の店」)に参加し、1992年から原子力資料室スタッフとなり、再処理・廃棄物問題を担当し、昨年退職しました。この間、1989年には再処理工場が建設中止になったドイツのパッカーズドルフ、ゴアレーベンを訪問し、2015年にはフィンランドのオンカロを見学しました。今回の講演会では、フィンランドとドイツの「核の「ゴミ」」問題への対応を、現地調査で撮影した多くの写真等をもとに講演していただきます。

最も印象に残ったことは、講演の最後の所で強調していた、「核の「ゴミ」と言わないで、『原発の「ゴミ』』と言いましよう」という言葉です。一般的に、ある会社が「ゴミ」・廃棄物を出した場合、「ゴミ」の発生源の会社に責任を持たせるのが現在の常識で、従って原発から発生した「ゴミ」は、原発を運転する電力会社が責任を持って処分するのが当然であるが、「核「ゴミ」という言葉は、その責任を曖昧にしてしまい、無責任体制

の日本を象徴しているのではないかと、という指摘をしていました。最初に、フィンランドのオンカロを見て、小泉元首相は原発は本当に危険なものだと学び反原発になった、というエピソードを話していました。「ドイツは、2022年までに全原発を停止することを決めたが、原発を止めても大変な核廃棄物処理の問題の答えは、どの国も出せないでいる。原発の「ゴミ」は、原発事故がなくても危険だ。世界で地層処分を考えている。」

フィンランドにおける取り組み

「フィンランドの電力は、水力発電と原子力発電でまかなわれている。原発に対する国民の信頼は強い。それは、エネルギー源がなく、スエーデンやロシアに挟まれて支配されてきた歴史に関係がある。第二次世界大戦時、スエーデンは永世中立国だったが、フィンランドはソ連が嫌でヒトラーと同盟を結び、日本と同じ敗戦国になった。(ソ連に依存することなく)自国で原発を作り、自立を目指してきた。原発の稼働率は高く96%。(世界の平均稼働率は70%くらい)国民は、原発会社を信頼している。」フィンランドの地理的歴史的特殊性が分かりました。

「オンカロは、オルキルオト島にあり、19億年前に形成された比較的安定な片麻岩と花崗岩の地層(岩盤)だ。実証トンネル内の埋設用立て坑に少し水が出ているが、乾いている。幌延などは、水が出るので不適当だ。ノーベル賞

はなぜできたか。土がなく岩ばかりの中、道路など作る場合岩を壊さなければならず、そのためにノーベルはダイナマイトを作った。ダイナマイトは戦争にも使われた。地震は、39年前にM4の地震が1回あった。(日本と大違い)次に、何が問題になるかと言うと、次の氷河期で、その時の氷の厚さは3千メートル。それが陸地に乗ったら、その重みで陸地が下がる。その時、処分場はどうなるかが心配だと、現地の人は言うている。」

「オンカロを誘致したエウラヨキという自治体の処分場誘致の最大の理由は、固定資産税の優遇措置にあった。誘致反対の人は、町民の3分の1いた。」



ドイツにおける取り組み

「ドイツでは、放射性廃棄物を、①発熱性放射性廃棄物(高レベル) ②非発熱性放射性廃棄物(中、低レベル)と分けている。ドイツ

では原子炉は2022年に全て停まる。全ての放射性廃棄物の最終処分は、ドイツ国内での地層処分とすることになっている。最終処分場サイトの決定は、2031年にすることにし、サイト選定法を2013年に制定している。その中で、選定のためすべての費用は事業者が負担するとしている(日本と違う)。」

「最終処分に伴う放射性物質の放出による影響から100万年にわたり確実に防護することなどの『放射性安全要件』も決定している。また、3段階のサイト選定手続きを規定している。さらに連邦レベルの公衆参加組織として、2016年12月に社会諮問委員会を組織した。これは、最終処分場のサイト選定手続きの開始から終了までの全プロセスを、中立的な立場から監視し、関係者間の調整を行う組織。」日本と違って、市民参加の体制を制度化していること、そして二つ二つ法律で決めていること、ドイツを見習うべきであると思いました。

この後、オランダの放射性廃棄物中央施設の例も若干紹介されました。

最後に、「核「ゴミ」と言わず、「原発の「ゴミ」と言いましよう、みんなだ」「原発の「ゴミ」の問題を話せる状態を作りましよう、と呼びかけて講演を終えました。

原告 中村廣治

2019年 活動報告会

6月8日、2018年度の活動報告会が開かれ、今年度の活動方針が決まりました。(抜粋)

1. 訴訟の取組みについて

廃炉訴訟は、今後も裁判の傍聴と裁判後の訴訟報告で会員への理解と浸透を図る。口頭弁論や訴訟報告会に参加できない会員には、ハイロニュースとホームページで報告を徹底する。

2. 訴訟外の活動

- [1] 廃炉の会としての活動
- 避難計画の問題についてパンフレットを作成する
- 核「ゴミ」などの学習会に取組む
- 新たな署名活動への取組み
- チカホでの広報・啓蒙活動

[2] 北海道連絡会について

廃炉の会は、連絡会の主要グループであり、今後も連絡会の一員として活動していく。来年3月のメモリアル集会や新たな署名活動、札幌市長への働きかけを行う。

お知らせ

お願いしておりました「北海道に核「ゴミ」を持ち込まないで!!」署名は、8月末をもちまして終了します。集計後、鈴木知事に提出します。皆さまの協力に感謝します。

ドイツ倫理委員会報告

ミランダ・シュラーズさんの講演を聴いて



2011年3月11日、福島第一原発事故はドイツの原発推進方針を180度変えました。ミランダ・シュラーズさんは倫理委員会のメンバーで、現在、ミュンヘン工科大学で環境気候政策教授です。

6月2日、聖公会札幌キリスト教会で開かれたミランダさんの講演要旨です。

原子力の倫理問題については、もっと以前から長い議論がありました。福島事故前には原発稼働を急いでやめることにはかなりの反対がありました。倫理委員会は、原子力エネルギー利用に伴うリスクを考えました。放射能放出の可能性、スリマール島やチエルノブイリや福島のような破局的な事故の可能性、放射性廃棄物の貯蔵、そして核拡散などの問題です。原発が安全なら、なぜ多くのエネルギーを消費している都市ではなく、遠く離れた田舎に建設されるのでしょうか。農村に住む人々の命の価値は、都市の人々と異なる扱いを受けていいのでしょうか？

委員会で話し合われたのは、将来の世代に、放射性廃棄物などの未解決な問題を残しながら、たくさんの

エネルギーを消費する生活スタイルを楽しむことが正しいのかという疑問でした。福島の大規模な事故が起きた現実から、目を背けることができないと判断したのです。倫理委員会の公開イベントは100万人の市民が見てくれました。

ドイツの2大政党は長い間、原発推進でした。でも緑の党が躍進し、社会民主党と緑の党の連立政権（1998〜2005）が新しいエネルギー政策を打ち出しました。そのことも大きかったです。

日本では再生可能エネルギー、風力発電による低周波音等で健康被害が各地で問題化し、訴訟が起こされていることに対して、ミランダさんは「ドイツではトラブルはあまり無いようです。風力発電を市民が買って、地域で作っています」と答えました。2020年までに、電力の35%を再生可能エネルギーで賄う目標を持っています。エネルギーの大転換のコストはかかりますが将来への投資だと言います。未来を見据えた政策に感動しました。論議が市民に共有されているのが素晴らしいですね。日本も見習いたいです。

将来を担う若者たちが希望を抱ける訴え方が必要だとし、原発に代わる再生可能エネルギーの可能性や新しい電力制度、省エネ建築など、未来のイメージを提供していくことが大事だとも話しました。

環境保護の先進国ドイツから、日本も学んで、脱原発に舵を切ってほしいと思います。福島の事故から国も電力企業も研究者も多くの国民も、何も学んでいないのはとても恥ずかしいです。

原告 樋口みな子

夢のガーデンを目指して

「あさこはうす」に通い始めてはや6年、毎年2回から3回、車の後ろに花の苗や水ガーデングッズ、着替えをもってフェリーに乗る。水は森町の元気の出る湧水を二十リットルのポリタンクに入れ3個持っていく。待っていてくれるのは満面笑顔の厚子さんと忠犬の五匹の犬である。

朝四時半、夫が草刈り機で伸びた雑草を刈る。私が中庭の雑草をスコップや移植ゴテで掘り起こす。毎年掘り起こしているところ植生が変わってくるのでだんだんやりやすくなってくる。中庭は雑草と様々な花が植えられていた。その都度工夫を凝らし、厚子さんの了解と希望をお聞きし、時間いっぱい植え替えた。潮風があたる庭は常に水が不足し、厚子さん一人ではとても管理できないのが現状である。せつかくきれいにしている。つたて来た時は草ぼうぼうの荒地である。滞在中にどのくらい花や苗を植える次に繋げるかいろいろ試行錯誤しながら進めている。大体の構想は頭の中に入っている。ツタでフェンスの囲いを緑にしたい、ロープにバラをはわせたい、紫陽花で周りを囲いたい、スモークツリーが大きくなりそよぐ庭にしたい等等夢は大きく膨らむ。そのために行うことはたくさんある。

漠然と植っていた植物を配置するのは時間と労力がかかり、タイミングもある。厚子さんの要望をお聞きし三人で動かしたことがあ



草刈り前▶

る。大鉢がそのまま、植えられ掘り起こすのに苦労したこともある。掘り起こし移動したときは充実感と満足感が残る。

昨年は、カフェをオープン。大好評で売上も良かったので今年も第二弾開催。支援者の方が朝一番に庭から採ってきた甘いさくらんぼや庭から積んできたたくさんの生の花束が庭を飾る。

長年約束していた「新月灯花」という女性ロックグループを招待してのコンサートも開催。「原発なんていらぬよ」と画家マシオンさんが絵を書く傍ら歌う。彼女たちは祝島と福島にも行くので「あさこはうす」の庭の花を交換に持って行きたいという。クリスマスローズとアルケミフモリス（聖母の羽衣）の花を一株ずつたくした。福島からは、葉牡丹の種をもらい一角に植えた。

事務局 大場幸子



室蘭工業大学
名誉教授
宮尾 正大

無責任な 核ゴミのツケ回し

今年8月2日、幌延の深地層研究センターは研究期間の延長を町と道に提出しました。日本の核開発の終端の要、使用済み核燃料処理から出る、いわゆる核のゴミを処理する方法を研究する研究施設の一つです。

燃やすとは核分裂させること

では核のゴミってなんでしょか。原発はウランかプルトニウムを燃やします。燃やしても石炭や薪を燃やすのと違って、原爆を少しづつ爆発させているようなものです。ウランやプルトニウムに中性子をぶつけると原子核に吸収されます。すると原子核は不安定になって真つ二つに壊れます。核分裂と言います。割れ方は片方が大きかったり小さかったりで、ウランやプルトニウムより軽いあらゆる原子が生まれますが、ほとんどが自然界にない不安定な原子で、強い放射線を出します。放射能物質です。

ウランやプルトニウム1つが核分裂するとき、余分な中性子が平均2個ちよつと放出されます。1つ壊れて2つちよつと中性子が出る、うまく利用すれば次々と核分裂が起きます。これが連鎖反応です。原子爆弾はこれで爆発します。

2つ放出された中性子が、全ての核分裂に使われれば、爆発は一気に進みますが、使われずに外に逃げ出す物もあります。連鎖反応を起こすには大きさを中性子を閉じ込める困いなどが関係します。火を燃やるとき薪の量が少なればなかなか燃えないのを、七輪などのように熱が逃げないようにするとよく燃えるのと同じです。

原子力発電はその量がきつちり1になるように設計して爆発はしないが連鎖反応は維持できるように運転しています。もし捕獲する中性子の数が1をわずかにでも超えたら何が起きるでしょうか。連鎖反応は一気に進み核爆発になります。反応の速度は人間が制御できる速さよりはるかに早いのです。

原子炉制御は難しい

ではなぜ原子炉は爆発しないのでしょうか。原発の説明には原爆は100%近い燃えるウランが使われているが原発は5%少ないからだと説明しています。これは真つ赤な嘘です。5%どころか100%どころか連鎖反応は同じよつに起きます。その影には遅発中性子という自然の巧みな働きがあつたのです。

核分裂は、ウランやプルトニウムが2つに分裂して起きます。この時分裂した原子も不安定で放射線を出します。その中に中性子を出す原子もあります。この中性子は少し時間的に遅れて出てきます。ほとんどゼロから十数秒以上遅れます。原発の場合(原爆でも同じ)、中性子の1%ぐらいの量です。この1%を利用して原子炉は制御されているのです。この1%の制御を失敗したのがスリーマイルやチェ

ルノブイリの原発事故でした。幸いにも福島では越えずに停止できましたが、原発は1%の綱渡りで制御されています。だから原発は急変する運転ができないのです。原子力ムラはこの1%の怖さを隠したために真つ赤な嘘をついたのでしょつね。

燃えカスは「死の灰」

薪や石炭を燃した灰は肥料になつて役に立ちますが、ウランやプルトニウムの燃えカすは死の灰とも言われるように猛毒です。さらに始末が悪いのは、科学的に処理できないことです。普通の毒カスも毒薬も高温で焼却すれば無毒化できますが、死の灰ばかりはそうはいきません。原子自身が放射線を出すので、どんなに化学処理を行つても無毒にはなりません。放射能物質が放射線を出し尽くしてなくなるまで待たなければなりません。出し尽くして我慢できるよつになる時間が10万年という代物です。

もつ少し正確に言います。新品の核燃料を原子炉に収め、3~4年発電すると使用済み核燃料になります。当初3~5%含まれていた燃えるウランは1%ぐらいまで減ります。代わりに燃えないウランが原子炉内で中性子を吸つて1%ぐらいまで増え、核のゴミが3~5%出てきます。核のゴミの中に核分裂を邪魔するものが溜まり、使用済み核燃料はそれ以上使えなくなるのです。

再処理は問題だらけ

使用済み核燃料をどうするかは

原発を利用する国によつて違いますが、世界の国のほとんどはそのまま捨てますが、日本とフランスは再処理をしてウランとプルトニウムを取り出し、燃えカすだけを処理する方法を選びました。その再処理工場として六ヶ所村の建設がはじまりましたが、23回完成を延期して、2020年の完成もわかりません。当初予定されていた建設費用も7600億円が2兆9500億円と3.9倍に膨れ上がり、電力代金に重くのしかかっています。

再処理から生まれるプルトニウムも大問題ですが今回は触れません。話を放射性廃棄物、いわゆる核のゴミに絞ります。六ヶ所村の再処理工場が稼働しない現在、世界で再処理を引き受けてくれる国はフランスとイギリスしかありません。ロシアは物がもですからちよつと頼めないでしょう。実は日本にも小規模の施設はありました。2006年に終わった東海村再処理施設です。1966年から2002年まで通算累積1000トンを超えました。現在はフランスとイギリスへ送つて処理してもらつています。使用済み核燃料を送つて再処理した核燃料と核のゴミが送り返されます。その費用は未使用の核燃料に比べてずっと高くなります。

核ゴミは地上管理で

問題は核のゴミです。使用済み核燃料はギロチンで細断され硝酸で溶かされます。ここから化学処理でプルトニウムとウランを取り出しますが、その後溶液が残されます。あらゆる核の燃えカすが溶けている溶液です。液体のままでは危険なので乾燥させその灰をガラスに固めたのが核のゴミです。ちなみに蒸発した水は強烈なトリチウム汚染水で、福島でも問題になっているよつに処理法がありません。薄めて海に捨てています。再処理工場は大量のトリチウム水を排出するのです。

出来たガラス固化体に人が近づけば20秒で死にます。そこで厚さ20cmの鋼鉄製の容器に収め30~50年かけて冷やします。その時点での放射線のレベルは近づけば数分で死ぬレベルです。このあとは厚い粘土で覆つて地下300m以下に埋設するとしています。金属容器と粘土の寿命は1000年程度、そのあとは地下水が地表に出てくるまで数万年、合わせて10万年持つと政府は説明しています。300メートルの地下に埋めるのは、地下水が地表に出てくる時間だとの説明です。

政府の説明をひとまずは信じましょう。でも穴があるように思えるのですが、仮に金属容器と粘土が千年持つたとしても、それ以後は地下水がゆつくり流れることに頼つています。断層や亀裂がなく、地殻変動もないという前提です。

日本の科学者を代表する機関である学会も疑問を呈しました。現在の科学では保証できないと。そして提案は、確実な方策が見つかるまで地上で人間が管理するべきであると。埋めてしまつて後は知らぬ存ぜぬは未来の地球への無責任なツケ回しだ。その時人類が生き残つているかどうかはわからないのに。私も日本学会議の考えに賛成です。

地域連絡会報告

泊原発廃炉の会・そらち

『2019年あさこはつす訪問記』

七月の下旬に、そらちの会員三名で大間原発の敷地に隣接したあさこはつすを訪問しました。

そらちでは五年間に渡ってあさこはつすを支援しています。今回は古米や飲料水、手作りのシヤムやピクルス、夕張の豆の缶詰、カンパ等を持参しました。

厚子さんと犬たちが元気に迎えてくれました。素敵な庭でコーヒーを頂いてから、広い畑で干し草を集めました。「ここにひまわりの種を蒔いて来年はひまわりのイベントを開きたい。」と、厚子さんは目を輝かせてい



奥戸漁港から大間原発

北区の会

北ガスのリレーマラソンに参加 泊ハイ口をアピールしました

7月6日、昨年に続きハイ口北区の会ではチーム名「泊ハイ口走友会」で北ガスグループ主催の札幌ドームリレーマラソンに参加してきました。

今回は「泊ハイ口」のアピール度を高めるためにチームとしてTシャツを作成しました。チームカラーをライムグリーン、胸と背に「泊ハイ口走友会」と印刷したものを着用し、また会場内にも「泊ハイ口走友会」のぼり旗を掲げました。参加チームのほとんどが企業内の同好会的なものの中で異色のチーム名だったと思います。

フクシマの事故から9年近くたち、オリンピックなどのお祭り騒ぎで脱原発の動きもいぶる中、日常生活が原発事故により脆くも崩壊してしまつてを少しでも考えるきっかけに

ました。留守中に記念樹の河津桜が倒されたり、やぎが殺されたたり、暗いニュースも語ってくれました。一人で抵抗を続けている厚子さんがあるお陰で、大間原発の建設が大幅に遅れています。電源開発は、2026年の稼働を目指して原発建設を続けています。

訪問する度に土砂の山が大きくなり、送電線の建設も進んでいません。大間原発を稼働させない闘いを今後も続けていきたいと思えます。



素敵な庭で談笑 左手熊谷厚子さん

幹事長 中川洋子



「ゆつくりラン」でした。1人1人が泊ハイ口の気持ち、走りこめて、走り歩きを含め昨年より少し長くアピールでき、所期の目的をそれなりに達成できたと思えます。大会の翌日には「泊ハイ口走友会」のTシャツを着、のぼり旗を掲げ、泊原発を再稼働させない全道連絡会主催の「7.7再稼働させない七夕パレード」にも参加してきました。

共同代表 加藤浩道

十勝連絡会

十勝連絡会は4月から署名アクションを再開し、「さよなら原発二千万署名」に取り組んでいます。この署名は、7月現在、全国で約878万人の署名が集約されており、引き続き12月まで取り組み、来春の通常国会に提出予定になっています。7月6日は9人で40筆、7月20日は6人で39筆、8月3日は34筆、8月24日も暑い中5人で1時間取り組み36筆集めることができました。三重の方は、「私たちはみんな反対して原発建設止めたいです」と署名に快く応じてくれました。このようにならなすの積み重ねで現在2800筆まで到達しています。近々東京の事務局へ集まった署名を送る予定です。原発反対運動継続の可視化のために引き続き署名アクションに取り組みます。



6月22日に更別村で小泉純一郎氏の講演会「自然エネルギーが日本の未来を創造する」(実行委員会主催)が開かれ、十勝連絡会の会員も多数参加しました。小泉氏は、2011年に福島原発事故が起こり、原発推進論者のウソが分かり、吉原毅氏などと、「原発ゼロ・自然エネルギー推進連盟」(略称:原自連)を設立し、原発ゼロ運動を始めたこと語りました。更に、原発事故は人災、原発なくとも停電なし、国が原発ゼロを宣言すれば、国民は協力するだろう。日本は明治維新(内戦)敗戦、石油ショックなどのピンチをチャンスに発展してきた。この度の原発事故を反省し、自然エネルギー推進の日本にしようと呼びかけ、小泉氏の原発ゼロに向けた気持ちに本気であることが伝わりました。原発ゼロを目指す運動が、原自連など共同して発展することを願う講演会になりました。

十勝連絡会は、今後、9月18日のNUMO説明会、10月6日の「さよなら原発北海道集会」、帯広市環境交流会、総会準備などに取り組む予定です。

十勝連絡会代表 中村廣治

釧路連絡会

◆6月10日

元原子力資料情報室スタッフの澤井正子さんを講師に迎え、「泊原発の廃炉をめがす会釧路連絡会」の発足記念講演会を開催しました。澤井さんの講演では、札幌講演と同じ資料を使い、主に、フィンランド、スウェーデン、オランダの核ごみ地層処分への取り組みや、ドイツの原子力関連委員会、社会諮問委員会に市民代表が選定されるプロセスなどについて詳しく解説され、「再処理事業や核ごみ深地層処分は最善とはいえず、拙速に進めるべきではない理由」



◆8月26日

NUMOの対話型セミナーが釧路で開かれました。一見して参加者およそ100名のうち、釧路連絡会のメンバー10数名が参加していました。先立つ7月2日には幌延深地層処分研究期間延長の申し入れを聴き、非核宣言都市が連帯することも知事に意志確認を申し入れた旨、恒例の金曜デモ集会で呼びかけました。

釧路地域連絡会 マシオン恵美香



～「核」を絵筆でぬりつぶせ ペンでかきあらためよ～

「8年目の3・11」展 かとう まふみ



8年目の3・11展「希望の種を捲く」

この展覧会のきっかけになったのは、講演会で私が「手から手へ」という展覧会の話をしたことでした。

ひだまりでは来て下さった1人1人の方にも感想をお話いただきました。伝える側と受け手という枠を越えて、お互いの気持ちの交流が生まれたすばらしい場になりました。

今、私は札幌で絵本作りをしながら、絵本の原画展やワークショップなどを行っています。
今年の2月23日から3月15日まで、旭川のごとく富貴堂で「8年目の3・11」という展覧会をしました。東日本大震災から8年、参加作家11名に、それぞれの思いを絵とメッセージにしてもらった展示です。初日の23日には作家の方に集まっていただけで、ギャラリートークをしました。それぞれの絵に込められた思いを聞いて共有することができて、とても濃い時間でした。その後、旭川の鷹栖図書室、旭川中央図書館と巡回して、5月17日から6月3日まで札幌のちいさなえほんやひだまりで展示しました。そして2度目のギャラリートークを開催。

それを聞いたことも富貴堂の方が「うちで3・11の展覧会をしましょう」と言ってくれたのです。
「手から手へ展」とは、スロバキア在住の降矢奈々さんの呼びかけで始まった展覧会です。「3・11」後の世界から私たちの未来を考える」というテーマで絵本作家を中心に作品を募りました。56名の参加でヨーロッパ5カ国を回り、日本巡回では更に増えて110名の絵本作家が参加して（私はここから参加）、全国8カ所で展示をしました。

震災当時、私は東京に住んでいました。今までに経験のない大地震、津波、そして福島原発事故。誰もがそうだと思いますが、大きなショックでした。
子どもがまだ小さかったこともあり家族で何度も相談して、その年の冬に北海道に移りました。
札幌に来た当初は、なんともいえない無力感で何も手につかず…。でも「手から手へ展」には参加していたので、この展示をぜひ移住した北海道で開催して欲しいと思い、実行委員をさせてもらうことになりました。そして北海道立文学館での「手から手へ展」が実現したのです。
本当にうれしかったです！
同時に関連企画展として、キタカラギャラリーで「FROM HOPE」展も始まり、この展示はその後3年間続きました。

2017年に私が参加していた「3・11」関連のチャリティー展がすべて終了。
時間の経過の中で薄まってくれ、感情と、何もしていない現実を苦く感じていました。そんなことを講演会でお話して、今回の「8年目の3・11」に繋がったのです。言葉にするのが大事だなあと改めて感じています。
震災から8年が過ぎた現実には、暗澹たる気持ちがあります。それでも、小さな希望の種があちこちにあり、着実に育ちつつあることも知りまします。
この展示も、ささやかな希望の種になり、いろいろな場所に広がって、どこかで芽吹きますように。
そして、私も小さな種まきを続けてゆきたいと思っています。

かとうまふみプロフィール
1971年、福井県生まれ。北海道教育大学卒業。
著書に「きまぐさのひ」（偕成社）、「けし」の「コムタ」と「コムゾー」（B1出版）、「おにぎりのひみこ」（フレール館）、「まんまるいけのおつきみ」（おならおぼけ）（講談社）、「ぬかどこすけ！」（あかね書房）、「まあちゃん」とリスのふゆじたく（アリス館）、「おもちのかみさま」（佼正出版社）など。挿絵の絵本に「ころろんひよっぴんシリーズ」（刈田澄子作・金の星社）などがある。



「ぬかどこすけ！」（あかね書房）

原告・賛同人の皆さま
日頃の皆さまの温かいご支援と活動へのご理解・ご協力に心より感謝いたします。
また、泊原発の廃炉をめぐる活動にご寄付いただき、ありがとうございます。
今後も泊原発の廃炉をめざして、活動してまいりますので、引き続きお力添えをいただきますようお願い申し上げます。

お知らせ

第29回 口頭弁論

2019年12月3日(火) 14:00～
札幌地裁（札幌市中央区大通西11丁目）

集合	13:10	大通公園西11丁目
集会	13:50～	傍聴抽選に外れた人対象
報告会	口頭弁論終了後～16:00	
会場	北海道高等学校教職員センター (札幌市中央区大通西12丁目)	

次回ニュースのご案内

幌延深地層研究センターは、2001年3月に始まった研究期間を「20年程度」と明記していましたが、日本原子力研究開発機構は8月2日、研究期間を2028年度末ごろまで延長する計画案を道と幌延町に提出しました。
今回のハイロニュースは、これに伴う諸問題を深く掘り下げたニュースを特集します。